

英語教育における1人1台端末活用実証事業 報告



課題

▲生徒の英語力、学習意欲 ▲言語活動・言語活動を通じた指導の充実 ▲英語の授業における1人1台端末の活用

事業内容

対象：県内公立中学校12校、1388名の中学2年生
導入ツール：英会話機能を有するAIツール TerraTalk
活用の具体：各校の実態に応じて、授業内外及び家庭学習で活用（活用期間はR5.9.1-R6.1.19）
例）毎時間の帯活動、言語活動と関連付けて、パフォーマンステストの前段階、宿題等

検証方法

生徒対象
【スキル面】実施前・後に、AIとの対話型タスクを実施
音読、スピーキング速度、即興性をAIが判定
【情意面】実施前・中・後に、アンケート調査を実施
教師対象
【授業改善への意識】実施前・後に、アンケートを実施

検証結果（概要）

【生徒・スキル面】

- 音読得点 70点以上(100点満点)の生徒 実施前 31.9% → 実施後 74.7% **(+42.8%)**
- スピーキング速度(SPM:1分間の発話における音節数) 160 SPM以上の生徒 前 20.3% → 後 25.5% **(+5.2%)**
- 即興性(AIの質問に対して発話を始めるまでの時間) 発話まで20秒以内の生徒 前 11.4% → 後 23.1% **(+11.7%)**

【生徒・情意面】

- 「英語で話すことは好き」 肯定的な回答 前 45.1% → 後 48.4% **(+3.3%)**
- 「AIとの対話練習をしてみて、実際に外国の人と話してみたいと思った」 肯定的な回答 前 49.1% → 後 51.8% **(+2.7%)**
- △「活用を通して、学習方法や学習の仕方を変えた」 肯定的な回答 R5.11月 17.9% → R6.1月 20.3% **(+2.4%)**微増だが割合低い

【教師・授業改善への意識】

- ▲「蓄積されたデータを生かした指導改善・工夫ができそうだ(できた)」 肯定的な回答の割合 前 89.0% → 後 67.0% **(-22.0%)**

考察

- ・スキル面(3項目全て)において伸びが見られた学校では、「英語で話すことが好き」の肯定的な回答も増加 → **スキル面の伸びによる意欲向上**
- ・活用時間の長さやスキル面の伸びには明らかな相関関係が見られなかったが、スキル面で伸びの顕著であった学校は、発音タスクや音読タスクよりも対話型タスクの活用時間が長い傾向がある → **対話型タスクと言語活動を関連付けた活用(AI対話と対人コミュニケーションを連動させた指導)を進めるなど、教師の工夫や単元のねらいに即した活用が必要**
- ・AIによる判定やフィードバックが学習方法等の見直しにつながった生徒は少ない → **従来通り、教師のかかわりやフィードバックが必要**
- ・教師が膨大な学習履歴や発話データを見取り、授業改善・工夫を行うのは困難 → **月別、タスク別等、一括閲覧可能なシステムの構築が必要**